

科学と文学的視点から見る陶晶孫の九州時代の作品

廖 莉 平
(中国) 電子科技大学

1 はじめに

創造社設立直前の1921年1月に、成仿吾は〈我々とほかの人々とちがう点は、科学上の基礎知識を持っていることである〉¹⁾と述べた。ここで成仿吾のいう〈ほかの人々〉はほぼ同時に設立された文学研究会のメンバーを指しているのであるが、彼らは自然科学者でありながら、文学者でもあるという二重の身分を有している。これまで、両団体の相違点について、研究者の間では主に創造社は芸術派で、文学研究会は人生派であると論じられてきた。これについては本論の主旨と関わらないため、ここでは触れないことにするが、両団体に属するメンバーの特徴といえ、おそらく成仿吾の言う通りである。

初期から創造社に参加した人々は学生時代に、郭沫若は医学、成仿吾は工学、郁達夫は経済学、張資平は地質学について学んでいた。卒業後、ほとんどの人は郭沫若のように専門知識を生かさず、創作に専念するようになったが²⁾、彼らの作品の中には、やはりこれまでに身につけた科学知識が多かれ少なかれ影を落としている。これについては、彼ら自身もそう語っており³⁾、また、科学と人文学との方法論的関連についての研究が中国で盛んに行われるようになった前世紀の80年代以後、研究者の間でも単純な作家研究より、多方面から彼らを研究する動きが現れてきた。後者の中でも、郭沫若研究が特に進められている⁴⁾。しかし、郭沫若の作品を精読すれば、精神病学などの知識が散りばめられていても、系統的に描かれていないことが分かる。

創造社の中には、医学の方法を用いながら系統的に創作した創造社のメンバーがいた。それは郭沫若と同じく九州帝国大学で学んだ陶晶孫である。創造社の初期から参加していたメンバーでありながらも、彼についてはあまり研究されてこなかった⁵⁾。これまでの研究は殆どが作品論であり⁶⁾、創作方法と医学との関連について論じたものは、拙論「陶晶孫と精神医学——『剪春蘿』を巡って——」以外に見当たらない。しかし、彼は生前、自分の作品、特に九州時代の作品について論じるたびに、必ずと言っていいほど、作品に自然科学者としての観察が生かされていると、強調していたのである。

本研究では、九州帝国大学在籍期間(1919.09～1923.03)に創作された五篇の作品を中心に医学方法論はどのように陶晶孫の創作方法に織り込まれているかについて考察してみる。

2 作家としての出発点

上述した通り、陶晶孫はもともと医学生である。いつから文学に興味を持つようになり、また、作家になろうと思うようになったのか。それらについて、まず、本節で述べておく。

陶晶孫は、10歳で父と共に来日し、その後、麻布三河台小学校、錦華小学校、東京府立第一中学校と一高の留学生特設予科を経、1916年6月に第一高等学校大学理科乙（医学）に進学した。そのまま東京帝国大学の医学部に進学するであろうと本人も考えていたようであるが、不本意ながらも、父の命令によって1919年9月に九州帝国大学の医学部に入学した⁷⁾。

陶晶孫の作品が初めて中国文壇に登場したのは、1922年8月に雑誌『創造季刊』第一巻第二期で発表された「黒衣人」である。しかし、彼が文学を目指し始めたのはここからではない。文学への開眼は恐らく彼の中学校時代まで遡らなければならない。

1910年に、陶晶孫は東京府立第一中に入学した。この府立一中は当時でも名門中の名門である。巖安生の調査によれば⁸⁾、その年〈入学志願者一一三一名、合格者一七一名、合格率一五・一%〉という状況であった。日本人でもなかなか乗り越えられないこの入学の難関を突破した陶晶孫はこの一中でどのような生活を送ったのだろう。次の文章から一中での生活ぶりをうかがい知ることができよう。

私達の根底は、全てこの学校（一中を指す：筆者注）で築かれてきたものである。これらは帰国後、世渡りのためになるものかどうかかわからないが、切実な学問に進む階段はこの学校によって得られた。私達が物質学に興味を持つようになったのも、正にここからだ。た。中略）また、私たちの学校がほかのより優れているのは、学校のすぐ傍に市立図書館があるところである。私達はいつも本を読みに行っていた。図書館の書籍はみな有益なもので、私達の進学思想を養ってくれたものも少なくなかった⁹⁾。

1930年8月21日に、陶晶孫の弟陶烈が横浜の病院で死去し、翌年、彼は「亡弟陶烈的略伝」を書き、『学芸』に発表した。上掲の引用文はその中から抜粋した一部である。陶烈は陶晶孫より約4歳年下ではあるが、一年遅れで一中に入ってきた¹⁰⁾。そのため、一中における二人の生活はほぼ重なっていたと考えられる。一中での生活が非常に有意義でその後の人生に多大な影響を与えたことが、上文から容易にうかがえる。〈物質学に興味を持）たせたのは、おそらく当時の一中の教育方針などと深く関わっていると思われる。当時の一中は、〈先駆者の先生たちの唱導によって動物の観察、採集や解剖から博物学的な実証研究までを重んずる一代の学風が形成した〉¹¹⁾と言われている。陶晶孫はこのような教育環境の中で少しずつ今後の歩む道が形成されたのである。また、学校以外に、彼らがよく図書館にも行ったことが分かる。この図書館でどんな書物を読んだか、彼ははっきり語っていないが、純粋科学に関する書物以外に、豊かな感受性を研いてくれる文学に関する書物も含まれていたに違いない。

後年、陶晶孫は「晶孫自伝」を書いた。その中でも中学校のことが触れられている。

中学校三年、高等工業の某教授の娘に恋をした。これは僕の初恋だ。ドイツ語の授業でゲーテの「魔王」のようなものを読んだりした。ロマンチズムの性格はこの時に形成された。またシラーの「手袋」を愛読した。学友の中に、高官貴族の子がおり、彼らと一緒にカフェへ行き、そこで文人に会い、彼らの生活を羨望した¹²⁾。

「晶孫自伝」における中学校についての一節では、恋や、文学に関わることに主に言及しており、純粋科学については全く触れていない。「晶孫自伝」が書かれた1943年前後には、中国で陶晶孫は医学者としてより文学者としてよく人々に知られていた。創造社が設立する前から、自分が主張してきた〈ロマンチズム〉の原点はどこにあったのか、ここで明白に書き、後世に伝えようという狙いがあったのであろう。

陶晶孫が一中で在籍したのはドイツ語組であった。このドイツ語組に在籍している生徒の親は殆ど〈わが子に医業を継がせるの〉である¹³⁾。彼らは国語、漢文、理科などの科目以外にドイツ語も学ばなければならない。英語クラスと違い、一中のドイツ語クラスが使っていた教科書は全てドイツから取り寄せられたものであった¹⁴⁾。〈ドイツ語の授業でゲーテの『魔王』のようなものを読んだりした〉というのは、恐らくドイツ語版であっただろう。ゲーテやシラーなどから文学的栄養を吸収し、そこで形成されたこの〈ロマンチズムの性格〉は、その後、彼の創作活動にどのように反映されていったのだろうか。

ところで、彼はいつから文学作品を書こうと思うようになっただろう。晩年、文学の道を歩み始めたきっかけについて、彼は「陶晶孫氏を囲む座談會」で次のように語っている。

私が大学に入って間もなく北京から『新青年』が一冊届いた。見ると理論は中々面白いが作品は大したことがないと思った。自分が短編を一つ書いて送ろうと思った¹⁵⁾。

字面通りによれば、陶晶孫が創作をしようと思うようになったのは〈大学に入って間もな〉い時期である。原時点では、その後、陶晶孫が実際に作品を『新青年』に送っていないことが確認されている。しかしながら、彼は何もしなかったというわけではない。それというのは、彼の提唱で『Green』という雑誌が作られたのである。

1927年に10月に出版された陶晶孫の最初の創作集『音楽会小曲』の「後書き」で、『Green』の創刊から〈流産〉するまでの経緯について、陶晶孫は郭沫若と何畏の言葉を援用しながら説明している。その中から出てきた、何畏が『Green』第一期の「編集後記」で記した内容を一部ここで訳出しておく。

本刊は創刊号であるため、わたくしも慎重にやってきましたつもりです。にもかかわらず、また十分にできていないところもありました。(中略) 次回の原稿は月末までにわたくしにお渡ししてください。

このタワーの工事が専ら晶孫兄の提唱によって進められたものだということは、皆さんのご存知の通りとはいえ、記念のためにここで改めて記しておきます。

この春、晶孫君がこの悩み煩う都会に来てくれたことは、いろいろな意味からいいますと、大いに感謝しなければなりません。わざわざ言わなくてもいいお話ですが、今思い出したため、思い切って書きました¹⁶⁾。(後略)

『Green』はいつ創刊されたか、今のところははっきり分かっていないが、巖安生の推測によれば、何畏が仙台の二高にいた1920年の夏までのある時期という¹⁷⁾。『Green』第三期に郭沫若が投稿したこと¹⁸⁾、また、陶晶孫が郭沫若と知り合ったのは1919年9月に九州帝国大学に入学してから¹⁹⁾とい

うことから判断すると、ここでの「この春」は1920年の春と考えられる。「このタワーの工事」というのは、これまでの研究では不明とされている²⁰⁾が、前述した「陶晶孫氏を囲む座談會」の話では、恐らく、『新青年』と違った作品を作ることであろう。具体的にどのような基準で、どのような作品を作るかということについては、陶晶孫はまた別のところで、次のように述べている。

私が中国における新文学を初経験したのは、私の妹から一冊の『新青年』が送られてきた時でした。私は初めて彼らが旧式の文章に反対しそれをもって創作することを許さないことを知りました。ちょうどその時に私もどうやって中国文学を改良するか考えているところだったので、思わず私は双手を挙げて賛成しました。しかし、同時に『新青年』に載せられた一篇の白話小説を読みました。これは口語から丸ごと写され、文章にしる内容にしる全て満足できない代物だと思いました。今振り返ってみれば、私は旧式の文章に反対しますが、文章の修飾性がやはりなくてはなりません。これは一種のRomanticismにほかなりません。

(中略)

この時期の小説はこのようなものでした。新しい文字は作りませんでした。新たな文章は作りました。古い文章を引用するの一切断っていました。一方、外国の言葉、文章と思想を受け入れました。この結果、理解してくれない文章や思想などがありました。理解してくれるのはただ深い知識を持つ人と感覚を研いでいる人だけでした²¹⁾。

上記の引用文は1932年に陶晶孫が『晶孫全集』を編纂するにあたって、第一集の序文として書かれたものである。言うまでもないが、この内容には専ら初めて『新青年』を読んだ感想と、新文学への自分なりの理解とが述べられている。前述した「陶晶孫氏を囲む座談會」と照合すれば、〈ちょうどその時に私もどうやって中国文学を改良するか考えているところだった〉というのは、〈大学に入って間もな〉い1919年の後半だと推定できる。その思いを十分に巡らし、やっと1920年の春に仙台にいる何畏に『Green』の創刊を提案したというここまで歩んできた道のりが推測できる。無論、提案のみならず、自分が文学に対する思いも二人で語り合ったと考えられる。陶晶孫のいう〈Romanticism〉、〈新しい文字〉を作らないこと、〈古い文章を引用〉しないこと、〈外国の言葉、文章と思想を受け入れ〉ることなどは、恐らく当時同じく日本で学習している何畏も同感であったに違いない。しかし、陶晶孫の主張する〈外国〉はアメリカでもなければ北欧、ロシアでもない。それは主にドイツを指している²²⁾。これは一中で読んできたゲーテ、ミラーというドイツの作家からの影響が如何に深遠だったかということを裏付けている。

この後、陶晶孫は自分の文学主張に従い、創作し続けてきたのである。彼も自覚しているように、〈この時期の小説はこのようなものでした〉と述べている。〈この時期〉というのは無論九州時代を指している。

九州時代には五つの作品が生まれた。その中の「黒衣人」、「木屋」と「尼庵」は『創造季刊』で発表され、他の二篇「洋娃娃」と「剪春蘿」は『音楽会小曲』に記載されている。これらの作品は全て恋に関するものであり、また、これらの恋は世間では認められない、タブー視されているものである。このような恋愛小説が書かれたのは、それまで陶晶孫がおかれた社会環境及び彼自身の恋愛観と密接な関係を持っている。これについては、拙論「九州時代の作品に見る陶晶孫の恋愛観」を参考された

い²³⁾。ここで注意されたいのはこれらの作品を一見すれば、文章の読みやすさ、また、当時中国の国内でみられない〈意識の流れ〉という表現方法などが随所に用いられていることが分かることである。ここから自分の主張を作品に一貫させようという陶晶孫の創作姿勢がうかがえる。当然、これらの小説には当時の中国人読者にとっては、〈深い知識を持〉っていなければ、理解し難い文章や思想があったわけである。

このように、一中で培った文学的教養は陶晶孫の体にしっかり根を下ろし、彼は一文学愛好者になった。そして、大学に入って間もない頃、読まれた『新青年』から刺激を受け、自分も〈短編を一つ書いて送ろうと思〉うようになったのである。

3 作品における医学方法論

かつて、陶晶孫は九州時代の作品について次のように自ら評価している。

(前略) 二十三、四歳の時に、小説を書いたが、幼稚だと思いで人に見せるのが恥ずかしかった。しかし、自分はこれらの作品が好きだった。というのは自分がそれらの作品に何か優れた点があったと思っていたから。その時期、各国の文学に自然科学知識をつけ加えて深く、また正確に考えていたからこそ、自慢ができるのである²⁴⁾。

陶晶孫が九州帝国大学に入学したのは23歳の時である。上の引用文には、この九州時代のことが語られている。彼がこの時期に書いた作品を幼稚だとは言いながらも、最も愛していたことは行間からうかがい知ることができよう。また、最も自慢に思っていたのは、ほかでもなく、〈各国の文学に自然科学知識をつけ加えて深く、また正確に考えていた〉ことであることに注意されたい。ここで、陶晶孫は九州時代の作品に自然科学知識が取り入れられていることについて、はっきり語っていないが、そのようなニュアンスが仄めかされている。

一体、彼は純科学知識をどのように自分の作品に取り入れたのだろうか。第二節で述べているように、九州時代の作品を一見すれば、全て恋愛に関するものばかりであり、医学に関する用語は一切見当たらない。そのためであろうか、2008年まで、拙論「陶晶孫と精神医学——『剪春蘿』をめぐって——」²⁵⁾が発表されるまで、作品に秘められている科学知識は無視されてきたのである。2009年に厳安生の『陶晶孫 その数奇な生涯』が出版された。これは陶晶孫を研究対象として発表された最初の書籍といってもよい²⁶⁾。しかし、400ページも超える該書籍の中でも、この点については一切ふれられていないのである。

上述した通り、これまで、筆者は一本の論文を出し、フロイトの精神分析学、特に夢解釈についての科学知識をどのように「剪春蘿」に生かしていたのかということを経過に論じた。しかし、仮に、この一篇のみで九州時代の作品を純粋な文学ではなく、自然科学者としての視点を取り込まれたものと評価するのであれば、それは陶晶孫が自分の作品に対して過剰評価をしているとしかいいようがない。なぜなら、精神分析学の夢についての解釈を作品に生かした人は彼だけではないからである。同じ九州帝国大学にいた郭沫若も彼よりもっと早い時期にこのような作品、例えば「残春」などを発表したし、また、フロイトなどの夢に関する理論を引用しながら、自分の作品に含まれている自然科学知識についても述べている²⁷⁾。

実は、陶晶孫は自分の作品の特徴、あるいは作家としての自分の特徴について語る時に、自分の作品と自然科学との関連について、他の文章の中でも語っている²⁸⁾。もし、自分の作品に他人と非常な相違がなければ、元々目立つことを好まない陶晶孫が、このように幾度にわたって強調するはずがない。

ところで、陶晶孫の作品は同時期に創造社のほかのメンバーの書いた作品とどう異なるのであろう。ここでまず結論を述べておく。ほかの作品と比較してみれば、陶晶孫の作品、特に九州時代の作品は自然科学的な方法論が散見されるのではなく、系統的に描かれているのである。つまり、我々は陶晶孫の九州時代の作品を考察する際に、作品を一つ一つ取り上げて見るのではなく、巨視的視点でこの時期のすべての作品を一つの作品としてみななければならない。そうすることによって、陶晶孫の言わんとすることがはっきり見えてくるのである。

さて、ここで、まず、九州時代の作品でそれぞれ恋にかかわる重要な人物を表示しておく。

(表1)

作品名	登場人物
木犀	素威 Toshiko
黒衣人	黒衣人 Tett
剪春蘿	葉 緑
洋娃娃	ピアノ先生 少女C
尼庵	兄 麗妹 妙因

「木犀」では、素威は男性生徒で、Toshiko は女性教師であり、「黒衣人」では、黒衣人と Tett は元来兄弟であり、「剪春蘿」では、葉と緑は男子生徒同士であり、「洋娃娃」では、ピアノの先生は男性で、少女Cはピアノを習っている生徒であり、「尼庵」では、兄妹の間の恋も描かれている一方、麗妹と妙因との女性同士の愛情も語られている。

九州時代の作品では、世間で認められる恋が一つも書かれていない。それは〈九州時代の作品は陶晶孫の大人世界に対する嫌悪感と、それに対立する純粋な子供世界に対する憧れという思念を秘めている〉²⁹⁾と論じられているが、陶晶孫はなぜこのようなテーマを繰り返し、繰り返し書き続けていたのだろうか。

恐らく、これこそ一から実証研究を重ねてきた、主に純粋科学に傾いた陶晶孫の創作スタイルといってもいい。陶晶孫にとっては、非正統かつ純粋な恋愛関係にも、これまで物質学で研究されてきたものと同じ、様々なパターンがある。例えば、彼が書きたい恋愛関係には、女性教師と男性生徒、男性教師と女性生徒、男性同士の生徒、兄弟（兄と弟・兄と妹）と女性同士というようなものがある。

一定の範囲で実験対象が異なれば、実験結果がどうなるのか、それは実証研究におく重要なプロセスである。陶晶孫は九州時代の作品で一つ一つ違うパターンを取り上げ、その結果を追求するように主人公たちの結末についてはっきり提示している。「洋娃娃」以外は全て〈死〉に繋がる結末である。「洋娃娃」は明確に〈死〉を言及していないが、主人公のピアノの先生が遠方に放浪することによって二人の愛は他の作品と同様に死別に等しい。九州時代に書かれた五つの作品はあたかも五つの実証研究を行ったかのように、作品を通して次のような研究結果が提示されている。

(表 2)

研究範囲	研究対象	研究結果
非正統かつ純粹愛	①女性教師と男性生徒 ②男性教師と女性生徒 ③男性同士の生徒 ④兄弟（兄と弟・兄と妹） ⑤女性同士	死あるいは死別

こうしてみれば、陶晶孫は創作する際に、「剪春蘿」のように、局部的に医学と文学を統合しようという考えで作品を書いただけではなく、系統的に両分野の方法論的交流の可能性を探りながら、小説を仕立てていたことが分かる。

かくて陶晶孫が文学と医学を一体化させようという計画を実行し始めたのは九州時代からとみられるが、文学と科学の関係に対する趣味と思考法との萌芽は、恐らく陶晶孫自身が語っているように、すべての根源を培った一中での学習時代に芽生えていたのだといえよう。両分野の関連性について、後年書かれた「学医的几个文人」³⁰⁾（「医学を学んでいた文人たち」）からよくうかがい知ることができる。

この文章の中で、陶晶孫はまず、医学と文学の定義について説明した。医学について、彼はこう書いている。〈医学とは、人類が生物学の立場から考察し、生体の機能を研究し、この病理の変化を研究した上で、物理学における化学的材料および方法で治療を考えるものである。〉また、〈病理の変化には必ず精神的病状が伴っているため〉〈医学には人々の主観生活が混じっている。〉一方、文学について、彼はまず文学の政治性などを批判してから、文学は人間性的なものを書く道具であるべきであると主張した。次に、文学者と医者の特徴について次のように述べている。

文学者は知識と感覚をもってこの仕事（人間性的なものを指す：筆者注）をやっている。この点については、各国古来から、文学は往々にして先人の文章の真似に陥りやすい。広範囲で観察していなければ、自然科学も取り入れられていない。このようなことは作文の授業でよく見かけられる。

医者の中で、よくある人が邪道に陥り、営業家になる。しかし、同時によくある人が病症を観察することから人間性的なものを観察し、それらのことを文芸作品に書いた³¹⁾。

文章の続きは、具体的に医学に関わったことがある文人たちを事例に取り上げ、一人ずつ医学と文学との関係について簡単に述べている。それらの文人の中には、一中時代に愛読していたゲーテ、シラーの名前もあれば、日本人の関係者も多く取り上げられている。

上掲の引用文から、陶晶孫が考える医者及び文学者のあるべき真の姿が分かる。医者は本来病症を考察する実証的なことをやるものであるが、人間の主観生活が混じっているため、人間性的なものも考察ができるし、このようなものを作品に書き入れることも可能である。一方、文学者はそもそも人間のものを書くべきであり、幅広く自然科学知識を取り入れなければ、先人からの踏襲でしかない。これらの内容を図で解説するならば、次のようなものになる。

医者 ^{本来} → 観察 (病症) …… (人の主観生活) ^{文学的な思想} → 観察 (人間性的なもの) → 創作
 文学者 ^{本来} → 観察 (人間的なもの) …… (自然科学知識) ^{科学的な思想} → 観察 (幅広く) → 創作

医学と文学を並行して研究する陶晶孫は上図で示されているように、両分野を統合する考えを持ち、また創作に実践させた。九州時代の作品はまさしくこのような考えの結晶なのである。

4 おわりに

以上、医学と文学的視点から九州時代の陶晶孫作品の特徴を論じてきた。簡単にまとめると、以下のことが確認できる。九州時代に陶晶孫は創作する際に、思い付きで作品を書いたのではなく、自然科学者が用いる考察力で、思念に思念を重ね、取り込んでいたことが分かる。また、自然科学の知識を一つ一つの作品に生かすのみならず、実験研究という物質的学の方法を使って、系統的に作品を書いたのである。そのため、九州時代の作品に登場する各々の人物は彼にとっては文学対象というより、研究対象だと考えたほうが妥当であろう。

注

(本稿の中国語の引用文の日本語訳は特別の提示をしなければ、総て筆者による。)

- 1) 郭沫若作 松枝茂夫訳『創造十年 続創造十年』、岩波書店、1960年8月、p69
- 2) 張資平は最初は大学で地質学に関して講義をしていたが、作家としての名声が高まると共に、専門作家に転身したのである。
- 3) 例えば、郭沫若は「批評と夢」(『創造季刊』第2巻第1期、1923. 5)で自分の作品「残春」に現れる夢と、当時彼が九州帝国大学で学んでいる医学知識と関連をつけて論じている。
- 4) 文学以外の観点から論じられた代表的な研究には、次のようなものがある。
 - ①張牛「弗洛伊德学说对郭沫若早期作品的影响」『探索』1985年第5期
 - ②卜慶華「论郭沫若早期的哲学思想」『求索』1992年第5期
 - ③周成平「郭沫若与精神分析学説」『江苏社会科学』1997年第2期
 - ④劉振興『“五四”科学語境中郭沫若的文学創作』修士論文青島大学 2004年
 - ⑤謝保成「郭沫若与『中国古代社会研究』」光明日報 2007年11月29日 など
- 5) これまで、陶晶孫の作品が殆ど注目されていなかった原因については、拙論の「陶晶孫と精神医学——『剪春蘿』を巡って——」(『熊本大学社会文化研究』6号pp.381~395)と『『黒衣人』について』(『熊本大学社会文化研究』7号pp.249~264)を参考にされたい。
- 6) 作品論以外に、実証研究や医学者として研究された論文もいくつかあるが、極めて少ない。例えば、巖安生『陶晶孫 その数奇な生涯——もう一つの中国人留学精神史』(岩波書店 2009年3月)、岡田英弘「陶晶孫伝稿」(『論集近代中国研究』山川出版社 1981年7月)、蔣本沂「中国社会医学的開拓者」(『陶晶孫百歳誕辰記念集』百家出版社 1998年12月)などがある。
- 7) 須田禎一「陶晶孫の人と作品——「創造社」群像の一つとして——」、原載『文学』30(9)、1962年9月。『日本への遺書』(勁草書房、1963年5月)所収 p237

- 8) 巖安生『陶晶孫 その数奇な生涯——もう一つの中国人留学生精神史』、岩波書店、2009年3月 p29
- 9) 「亡弟陶烈略伝」、原載『学芸』第11巻第4号、1931年4月。陶晶孫『牛骨集』（上海太平書局、1944年5月）所収。『陶晶孫選集』（人民文学出版社、1995年5月）、pp.305～306
- 10) 陶熾が陶晶孫より一年遅れて府立一中にも入校し、1916年に同時に一中を卒業したことが巖安生の調査によってわかる。注8)に同じ。p29
- 11) 注8)に同じ。p34
- 12) 陶晶孫「晶孫自伝」、初出『牛骨集』。『陶晶孫選集』所収、pp. 235～236
- 13) 注8)に同じ。p46
- 14) 注8)に同じ。p43
- 15) 「陶晶孫氏を囲む座談會」『三田文學』41(3)、三田文學會、1951年7月、p60
- 16) 陶晶孫「書後」、原載『音楽会小曲』（創造社出版部、1927年10月）。『陶晶孫選集』pp.163～164
- 17) 注8)に同じ。p182
- 18) 注16)に同じ。p164
- 19) 陶晶孫「創造三年」、初出『牛骨集』。『陶晶孫選集』p257
- 20) 巖安生はタワー工事の意味について〈晶孫の子息に対するヒアリングを含め可能な限り調べてみた〉が〈不明である〉と書いている。注8)に同じ。p182
- 21) 陶晶孫「第一集序」、『晶孫全集』（上海暁星書店出版社、1941年）。のち『陶晶孫選集』に転載され、編集者によって「晶孫自序」に改題された。小論では後者に徴する、p3
- 22) 陶晶孫「記創造社」、初出『牛骨集』。『陶晶孫選集』pp.241～242
- 23) 廖莉平「九州時代の作品に見る陶晶孫の恋愛観」『熊本大学社会文化研究』（15）、2017年3月、pp.261～270
- 24) 陶晶孫「再会罢、文壇」、1944年11月23日『大陸新報』、『陶晶孫選集』p364
- 25) 陶晶孫「陶晶孫と精神医学——『剪春蘿』をめぐって——」『熊本大学社会文化研究』（6）、2008年3月、pp.381～395
- 26) 1998年12月に『陶晶孫百歳誕辰記念集』が出版された。本書は、日中における陶晶孫研究の関係者および子息、友人たちの文章により構成される。研究発表もあれば、エッセイのようなものも掲載されているため、純粋な研究書籍とはいえない。
- 27) 前掲注3)に同じ。
- 28) 例えば、『音楽会小曲』の「後書き」、「記創造社」などでふれられている。
- 29) 陶晶孫「陶晶孫の日本時代——九州時代の作品とそれ以後の作品との違いは何故生じたのか」『熊本大学社会文化研究』（8）、2010年3月、p333
- 30) 陶晶孫「学医的几个人」、初出『牛骨集』。『陶晶孫選集』
- 31) 同上。p231

【付記】本論文は二〇一四年度電子科技大学中央高校基本科研助成金「自然科学基礎における創造社初期文学に関する研究」(No ZYGX2014J123)の成果の一部である。

Study of Tao Jingsun's Works During Kyushu Times from the Perspective of the Relationship Between Science and Literature

Liao Liping

University of Electronic Science and Technology of China

Early members of ChuangZaoShe (創造社) are overseas students, a majority of whom come from academic disciplines associated with natural science. Integration of scientific knowledge in literary production has long been indispensable to the study of ChuangZaoShe. Tao Jingsun, the subject of this paper, is not only one of the early members in ChuangZaoShe, but also has repeatedly articulated in his few articles that observation from standpoint of natural science has been incorporated in his own works. However, interdisciplinary integration of science and literature reflected from Tao Jingsun's works has not been attached sufficient importance to in previous researches. Therefore, this paper aims to explore the fusion of natural science into literature through Tao Jingsun's works in Kyushu Times. It is found that Tao Jingsun endeavors to apply knowledge of natural science to his practice on one hand, and on the other, adopts empirical approach of natural science in his literary production regarding artistic techniques.